

Poster (Subdiscipline) | 専門領域別：Pedagogy

体育科教育学 ポスター発表**[11 教-ポ-01] 跳び箱運動における終末局面からの指導に向けた運動課題の検討**

発生運動学的立場からの「教材づくり」の試み

○Moriatsu Nakasone¹, Tomonari Kikuchi² (1.Tokyo Gakugei University, 2.Koriyama Municipal Asahigaoka Elementary School)**[11 教-ポ-02] 体育授業における形成的没頭度尺度の開発**

単元を通じたデータによる妥当性の検討

○Koji Murase¹, Akihisa Umezawa² (1.Wakayama University, 2.Yokohama national university)**[11 教-ポ-03] 小学校6年生におけるネット型のゲームパフォーマンスに関する達成基準の事例的検討**

攻守一体型「テニスの簡易型ゲーム」の単元を通して

○Masahiro Kitamura¹, Nozomi Nakagawa², Yoshinori Okade³ (1.Shimoinayoshi Elementary School, 2.Iwaki Junior College, 3.Nippon Sport Science University)**[11 教-ポ-04] 小学校体育におけるボール運動系の3つの型の授業に対して女性教諭と男性教諭が感じている課題の違い**○Keisuke Iwama¹, Minoru Ota², Manami Koide³, Yuka Suzuki⁴, Tomohiro Kizuka¹ (1.University of Tsukuba, 2.Juntendo University, 3.University of Tsukuba, Graduate School, 4.Hitachi, Ltd. Softball Club)**[11 教-ポ-05] 小学校体育におけるテニス授業のケース・スタディ**

授業の困り感とその解決に向けて

○Yuji Ohnishi¹, Tetsu Kitamura¹, Kouhei Kotani¹, Emi Tsuda² (1.BIWAKO SEIKEI SPORT COLLEGE, 2.West Virginia University)**[11 教-ポ-06] 河川での実習及び教室での水泳の事故防止の心得の授業の効果の検証**

中学生の海及び河川のリスクに対する認識に着目して

○Ryosuke Inagaki¹, Toshiyuki Kishi², Koichi Hasegawa³ (1.Gifu Shotoku Gakuen Univ. , 2.University of Fukui, 3.Joetsu University of Education)**[11 教-ポ-07] 保健学習における知識の習得と思考力の関係**

感染症・エイズ及び性感染症の学習から

○Masatoshi Takahashi¹, Junya Takase³, Takeya kawamoto⁴, Masayuki Murakami⁵, Toshihiro Nakajima² (1.TOKAI University, 2.Hokkaido University of Education Sapporo, 3.Hokkaido University of Education Asahikawa, 4.Sapporo E.S. Affiliated to the Hokkaido Univ. Edu., 5.Sapporo Kitakujoyou Elementary School)**[11 教-ポ-08] 技能的及び心理的セルフ・コントロール能力育成を意図した長距離走単元の開発と検証**○Hiroshi Koyama¹ (1.TOKOHA Univ.)**[11 教-ポ-09] 学校体育におけるタグラグビーの教材設定に関する検討**○Katsuhiro Hirose¹, Takahito Kurohara², Toshihito Kajiyama³, Hiroyuki Kajihara⁴ (1.Kyoto Sangyo Univ., 2.Kyoto Women's Univ., 3.Asahi Univ., 4.Yamanashi Gakuin Univ.)**[11 教-ポ-10] 高専体育におけるICTを用いたフィードバックが学生の主観的理解度にもたらす影響**

バレーボールのアンダーハンドパスに着目して

○Yutaro Nakamura¹, Hiroshi Mizokami² (1.National Institute of Technology, Toyama College, 2.Sendai University Faculty of Sports Science)

[11 教-ポ-11] ダンス作品映像の鑑賞におけるダンス初心者の認知

○Hidemi Soma¹ (1.shigakkan university)

[11 教-ポ-12] スポーツ指導者としてのコミュニケーション能力育成の学習プログラムの開発と評価

ポストコロナ時代に向けての検討

○Ayaka Habata¹, Yoshiko Murata¹ (1.Heisei International University)

[11 教-ポ-13] 小学校教員志望学生のICTを活用したマイクロティーチングにおける授業力量の事例的検討

教授技術とTPACKに着目して

○Makiko ETO¹ (1.University of the Ryukyus)

[11 教-ポ-14] 保健体育科教員養成における指導と評価の一体化を図るためのデジタル教材の開発

実態調査による検討

○Minoru Yamada¹, Shinichi Fukuchi² (1.Tamagawa University, 2.Kanagawa Prefectural Integrated Education Center)

体育科教育学 ポスター発表

[11 教-ポ-01] 跳び箱運動における終末局面からの指導に向けた運動課題の検討

発生運動学的立場からの「教材づくり」の試み

○Moriatsu Nakasone¹, Tomonari Kikuchi² (1.Tokyo Gakugei University, 2.Koriyama Municipal Asahigaoka Elementary School)

跳び箱運動における切り返し系の技の指導法に関しては、これまで数多く提唱されその有効性が確認されている。しかし、現在においても切り返し系の指導法が確立されているわけではなく現場の指導者によって様々である。金子（1987）はその著「跳び箱・平均台運動」において踏み切りからではなく着地から順に基礎技能を習得していくことを薦めているが、毎年のように提案される新しい指導法は助走から指導するものであり、それに加えて補助や新しい用具を用いた研究も多く、小学校現場では補助者の専門的能力や費用の面で中々実施することが難しい現状もある。教員養成系大学で器械運動の授業を担当している筆者は終末局面からの指導を実践しているなかで、1)運動中の補助を行わないことで新たな専門的技能や知識を獲得する時間を抑えることができること、2)年配の教員や体力的に補助ができない教員の負担を減らすことができること、3)終末局面から指導することで学習者の助走を抑え、怪我を軽減させることができること、4)どの局面の技能が不十分なのかが明確になる、などそのメリットを実感している。しかしながら、終末局面から指導をした研究がほとんどないために上記の有効性が実証されるにいたっていない。そこで本研究では、跳び箱運動において切り返し系の技を終末局面からの指導をする有効性を検証するにあたり、各局面と段階毎に取り上げる課題を検討していくこととしたい。上記の目的を達成するために、第一に学習指導要領や教科書さらにはこれまで市販された器械運動指導における文献や先行研究を収集した。第二に、それらで用いられている運動課題をマイネル（1981）の局面構造理論によって分類した。その後、筆者及び小学校教員である第二筆者によって発生運動学における動感アナログン理論をもとに運動課題を整理した。

体育科教育学 ポスター発表

[11 教-ポ-02]体育授業における形成的没頭度尺度の開発

単元を通じたデータによる妥当性の検討

○Koji Murase¹, Akihisa Umezawa² (1.Wakayama University, 2.Yokohama national university)

体育授業における形成的評価は形成的授業評価(長谷川ほか、1995)が代表的である。この尺度は「成果」、「学び方」、「協力」、「意欲・関心」の4因子から作成されている。しかし、この尺度は作成から20年以上が経ち、その間に体育には身体的リテラシーやインクルージョン (UNESCO,2015)が提唱された。ここでは、障がいや性別など多様性の包括が重視されるようになった。そのような状況のなかでは、授業の評価として「成果」ではなく「どう取り組めたか」が必要ではないか。村瀬ほか(2017)は診断的評価尺度として体育勤勉性尺度を作成した。村瀬ほか(2017)は勤勉性を「楽しむ能力」として捉え、運動に主体的に取り組む資質として評価している。この考え方を元に、体育の授業評価として没頭度尺度を作成することで、現代の体育に求められる形成的な授業評価尺度を作成できるであろう。

そこで、本研究は体育授業に対する没頭度を評価する形成的没頭度尺度を作成するにあたり、これまで収集した単元内の変化からその妥当性を検証することを目的とする。

体育科教育学 ポスター発表

[11 教-ポ-03]小学校6年生におけるネット型のゲームパフォーマンスに関する達成基準の事例的検討

攻守一体型「テニスの簡易型ゲーム」の単元を通して

○Masahiro Kitamura¹, Nozomi Nakagawa², Yoshinori Okade³ (1.Shimoinayoshi Elementary School, 2. Iwaki Junior College, 3.Nippon Sport Science University)

小学校学習指導要領解説体育編のボール運動領域において、新たにテニスやバドミントンといった種目が示された。授業の質の保証に向けては、エビデンスに基いた適切な達成基準の設定が求められる。しかし、現状では、適切な達成基準を設定する根拠となるデータの蓄積は乏しい。そこで本研究は、小学校6年生のネット型の攻守一体の種目であるテニスを簡易化したゲーム中に期待しうるゲームパフォーマンスの達成基準を明らかにすることを目的とした。そのため、児童が行ったダブルスのメインゲームを撮影し、そこで発揮されたゲームパフォーマンスの分析を行った。その際、Memmet（2008）が提案した成功数と失敗数に10を加え、 $\text{指数} = \frac{(\text{成功数} + 10)}{(\text{成功数} + 10 + \text{失敗数} + 10)} \times 100$ を算出し、その指数が50を超えた場合を合格ラインと設定した（北村ほか、2014）。その結果、期待する達成基準をクラス全体の7割の児童が通過可能な達成率（中垣・岡出、2009）とした場合、今回適用したゲームでは、単元終了時には「打ちやすい位置に入る動き」、「コースの選択」、「相手コートに返球」、「元の位置に戻る動き」が達成可能であることが示唆された。

体育科教育学 ポスター発表

[11 教-ポ-04]小学校体育におけるボール運動系の3つの型の授業に対して 女性教諭と男性教諭が感じている課題の違い

○Keisuke Iwama¹, Minori Ota², Manami Koide³, Yuka Suzuki⁴, Tomohiro Kizuka¹ (1.University of Tsukuba, 2.Juntendo University, 3.University of Tsukuba, Graduate School, 4.Hitachi, Ltd. Softball Club)

平成29年に改訂された小学校学習指導要領では、ボール運動系の領域において、ゴール型、ネット型、ベースボール型の3つの型の運動が取り上げられている。3つの型それぞれで児童が身に付けるべき知識及び技能は異なるため、それぞれの型の授業で教諭が感じている課題も異なることが推測される。また、令和2年度版の文部科学統計要覧（文部科学省）において、小学校における女性教諭の割合は64.1 %であり、小学校教諭の約2/3は女性である。先行研究においても体育授業の学習指導に関して、女性教諭と男性教諭とでは指導上の悩みが異なると報告されておりボール運動系の3つの型の授業でも感じている課題が異なる可能性がある。

そこで本研究の目的は、小学校体育におけるボール運動系の3つの型それぞれの授業を実施する際に女性教諭と男性教諭が感じている課題の違いを明らかにすることであった。これらを明らかにすることで、より現場の実態を踏まえた改善策の検討が可能となるのみでなく、より効果的な指導法や教材を検討するための有益な情報となることが期待される。

横浜市 T区内の小学校に勤務する小学校教諭を対象として自記式質問紙法にて調査を実施した。調査内容はボール運動系の3つの型それぞれにおいて、授業を実施する際に課題だと感じるもの（「道具がそろっていない」、「実施するスペースがない」、「児童の怪我が心配である」、「児童の興味・関心をひくのが難しい」、「自身の知識および技能に不安がある」、「教材研究が難しい」）について、「1.とてもそう思う」、「2.そう思う」、「3.あまりそう思わない」、「4.そう思わない」の四件法で回答を求めた。その結果、女性教諭と男性教諭とでは授業を実施する際に課題を感じている者の割合、課題を感じている型、課題と感じている内容が異なることが明らかになった。

体育科教育学 ポスター発表

[11 教-ポ-05]小学校体育におけるテニス授業のケース・スタディ

授業の困り感とその解決に向けて

○Yuji Ohnishi¹, Tetsu Kitamura¹, Kouhei Kotani¹, Emi Tsuda² (1.BIWAKO SEIKEI SPORT COLLEGE, 2.West Virginia University)

平成29年改訂の小学校学習指導要領解説において、ボール運動（ネット型）の例示でテニスが初めて示された。これまでのテニスを含む攻守一体型の研究では、テニピンを開発した今井（2012, 2018, 2021）を筆頭に数多く見られる。宮内（2018）は、攻守一体型の先行実践を総括し、それらの実践が用具を用いないものと手に板状のものを装着して行うものに大別されることを報告している。ラケットを使用した実践については、石原ほか（2018）が3時間のテニスプログラムを開発し、学習機会や一定の運動量が確保されたという成果を示す一方で、教師の指導力を課題として指摘している。

以上の小学校体育授業における攻守一体型に関する研究は、用具なしあるいは手に装着する用具の実践内容の報告や、教材の成果検証を中心に行われてきた。しかし、授業者の視点に立った研究はみあたらず、ラケット使用の可能性については引き続き検討が求められる。

そこで本研究は、小学校体育においてラケットを用いたテニス授業を実施した際に生じる、授業の困り感とその解決の手がかりを明らかにすることを目的とする。研究方法は、小学校6年生を対象に実施した7時間のテニス授業について、授業者の毎授業後の振り返りの発話内容、単元終了後の半構造化インタビューをデータとして収集した。なお、本実践は授業者と大学教員の協働関係に基づいたアクション・リサーチデザインを用いた。分析には質的帰納法（コーディング）を用いた。

その結果、①テニスのグラウンドストロークというシンプルな技術ゆえに、教材のバリエーションのイメージが持ちにくいこと、②個人やペアでの活動では人間関係への配慮が必要になること、③ラリーを続けることと断ち切ることの競技特性と関わって、学習者の意識を踏まえつつ学習課題を提示しなければならないこと、に難しさが生じていた。これらの解決の手がかりを見出すことができた。

体育科教育学 ポスター発表

[11 教-ポ-06]河川での実習及び教室での水泳の事故防止の心得の授業の効果の検証

中学生の海及び河川のリスクに対する認識に着目して

○Ryosuke Inagaki¹, Toshiyuki Kishi², Koichi Hasegawa³ (1.Gifu Shotoku Gakuen Univ. , 2.University of Fukui, 3.Joetsu University of Education)

水難事故に対しては、未然に危険を回避する能力を育成することが重要である。本研究は、中学生に河川での実習(1回)及び教室での水泳の事故防止の心得の授業(1回)を実践し、河川及び海のリスクに対する認識にどのような変化をもたらすのか検証した。中部地区 A 中学校の1年生47人を対象とした。調査紙は、A4 用紙の上半分に河川(もう一方は海)の写真を示し、「あなたは、川(下の写真)で遊ぶ際に、気をつけることは何ですか。記入らんに、箇条(かじょう)書きで、書いてください。」と記載した。授業と調査の時系列は「事前調査ー河川での実習ー事後調査ー教室での水泳の事故防止の心得の授業ー遅延調査」であった。3回の調査で得られた回答について、KHCoderを用いてテキストマイニングを実施した。「河川」に対する回答を分析したところ、実習後は、「歩く」と「心構え関連」及び「危険要因関連」のグループに新たな共起関係がみられた。対象生徒は、河川を歩行するという経験を通して、人的及び物的環境の危険要因を関連付けて認識すると推察された。教室での授業後は、「ライフジャケット」、「ルール」が新たにみられた。ライフジャケットは、河川での実習で用いたにもかかわらず、教室での授業後に出現した。ライフジャケットの有用性を認識させるには、活動時に着用させるだけでなく、知識として学習する機会も重要である。「海」に対する回答を分析したところ、実習後は、「クラゲ」が中心からはずれ、強い共起関係で結ばれたグループが増加(4から5)した。対象生徒は、河川での実習で経験したことを海という別の水域にもある程度般化させて認識することが示唆された。教室での授業後は、「離岸流」が新たにみられ、また、語種数が増加した。河川での実習では認識できない内容について、教室での授業によって新たに知識として獲得したことが示唆された。

体育科教育学 ポスター発表

[11 教-ポ-07]保健学習における知識の習得と思考力の関係

感染症・エイズ及び性感染症の学習から

○Masatoshi Takahashi¹, Junya Takase³, Takeya kawamoto⁴, Masayuki Murakami⁵, Toshihiro Nakajima²

(1.TOKAI University, 2.Hokkaido University of Education Sapporo, 3.Hokkaido University of Education

Asahikawa, 4.Sapporo E.S. Affiliated to the Hokkaido Univ. Edu., 5.Sapporo Kitakujyou Elementary School)

【研究の背景と目的】保健学習における思考力の育成は、対話的な学びの推進により様々な実践が重点的に進められているところである。しかしながら、思考力の育成だけを重視するだけではなく、基礎的な知識の習得とのバランスの取れた学習指導が必要であると考ええる。そこで、本研究は感染症、エイズ及び性感染症の知識の習得の違いと、思考力の内容の特徴を分析し、中学校の保健学習における知識の習得と思考力との関係を事例的に明らかにし、学習指導の在り方を検討することを目的とした。

【方法】札幌市 A 中学校の第3学年の生徒103名（男子50名、女子53名）を対象とし、2017年8月から9月に調査した。知識の測定は、中学校学習指導要領解説・保健体育科編と、対象校で使用している教科書に基づき、記述式の問題14項目のテストを作成して実施した。思考力は感染症の予防方法とし、単元の終了後にワークシートに記述させた。この予防方法の記述内容について、質的解析ソフト NVivo12（QSR International）を用いて頻出語を抽出し、思考力の評価として分析を行った。

【結果と考察】感染症の知識得点の上位群は下位群に比べて、ウイルスなどの病原体を消毒すること、手洗により感染経路を遮断すること、休養や運動、ワクチン接種の記述が確認できた。また、エイズ及び性感染症の予防では、不特定多数のパートナーとの性的接触を避けること、ウィンドウピリオドや潜伏期間などのエイズ特有の疾病概要を用いて説明できていた。また、予防方法を適切に説明できる群と説明不足の群では、適切な説明ができる群が、感染症とエイズ及び性感染症の知識の得点が有意に高い値を示した。このことから「感染症の知識の習得」と「予防方法を具体的に示して説明する思考力」には関係があり、知識と思考力を互いに関連させながら習得していく学習指導が必要と考える。

体育科教育学 ポスター発表

[11 教-ポ-08]技能的及び心理的セルフ・コントロール能力育成を意図した 長距離走単元の開発と検証

○Hiroshi Koyama¹ (1.TOKOHA Univ.)

本研究の目的である、体育学習が認知能力としての技能的なセルフ・コントロール能力と非認知能力としての心理的なセルフ・コントロール能力の育成にどのように係わるかについて、2年目の取り組みであった。

2020年の7月に浜松市の公立中学校1,2年生を対象に、心理的なセルフ・コントロールの予備の追調査を実施した。さらに、2020年11月から、主調査を研究協力校である東京都内の国立大学附属中学校において、体育授業「長距離走単元」の本研究での第2回を実施した。単元の前後に、心理的なセルフ・コントロール能力についてのアンケートを昨年度同様に実施した。また、技能的なセルフ・コントロール能力についての変容も、昨年度と同様、単元カードに記載された授業記録から読み取った。

結果として、心理的なセルフ・コントロール能力については、単元前後で項目毎に若干の変容は見られたが、一次分析において、昨年度と同様に総合的には、有意差を検出するには至らなかった。データのより詳細な分析を、COVID-19感染拡大前後の比較と合わせ、2019年度、2020年度のデータの結果を踏まえつつ、結論を導いていきたいと考える。一方の技能的なセルフ・コントロール能力については、長距離走において、自己のペースを一定にコントロールして走る能力を技能的なセルフ・コントロール能力として捉え、単元前後での変容を検討した。2019年度と同様に予定タイムと、結果タイムとの差を記録した。単元が進むに従ってどのように変化するかを調べた。結果は、2019年度と同様に、この差の有意性を見ることができ、単元を通して技術的セルフ・コントロールの慎重を確認することができた。

以上のことから、体育学習において、特に長距離走単元では、セルフ・コントロール能力のうち、技能的なものは生徒に獲得させうるが、心理的なセルフ・コントロール能力は伸張させえない可能性が示唆された。

体育科教育学 ポスター発表

[11 教-ポ-09]学校体育におけるタグラグビーの教材設定に関する検討

○Katsuhiro Hirose¹, Takahito Kurohara², Toshihito Kajiyama³, Hiroyuki Kajihara⁴ (1.Kyoto Sangyo Univ., 2.Kyoto Women's Univ., 3.Asahi Univ., 4.Yamanashi Gakuin Univ.)

ボールゲーム系領域ゴール型において、現行中学校学習指導要領解説では、陣取りゲームの取り扱い（タグラグビー）が初めて可能となった（文科省、2017）。加えて、小学校-中学校-高校の12年間の学びの一貫性の考慮が必須要件となったため、体育授業でタグラグビーは容易に取り組むことができると考えられる。ところが、タグラグビーを扱う先行研究（実践研究）は数多く存在しない。その主たる理由は、陣取りゲームであるタグラグビーの授業づくりの難しさであるといえる。ゴール型のゲーム場面では、攻防が対峙する状況の違いから派生する〈攻め方と守り方の差異〉が存在する。それは、中盤を有するゴールを目ざすタイプ

（例：サッカー等）と、攻防が分離し相手と向きあい陣地を取り合うタイプ（例：タグラグビー等）の2つの違いである。この2つの差異化に加え、タグラグビーからラグビーに発展する過程では、守り方の手段に包含される身体接触（コンタクト）の導入過程に関する難しさもあげられる。そこで、本研究では、〈12年間の陣取りゲームの学習〉を目標としながら、先行する実践研究等を下敷きにしてタグラグビーのゲーム教材配列を行い、その内容に関する検討を行うことを目的とする。検討に関しては、タグラグビーからラグビーへの円滑な繋ぎに関する視点及び身体接触（コンタクト）の導入過程を含むこととする。検討手順は、これまでの先行研究の確認を通して、ゲーム教材設定における課題の抽出を行い、ゲーム教材の仮配列を行う。その後、タグラグビーの授業実践を継続的に取り組む小学校教師・中学校教師に対して、仮配列を行ったゲーム教材に関する実践上の課題についてヒアリング調査を実施する。上記過程にしたがって、課題抽出及び教材配列の改善点に関する整理を行い、授業実践を通した検証のための基礎資料としたい。

体育科教育学 ポスター発表

[11 教-ポ-10]高専体育における ICTを用いたフィードバックが学生の主観的理解度にもたらす影響

バレーボールのアンダーハンドパスに着目して

○Yutaro Nakamura¹, Hiroshi Mizokami² (1.National Institute of Technology, Toyama College, 2.Sendai University Faculty of Sports Science)

教育現場において ICTを用いた授業が展開され、教育活動の一役を担っているのは周知の事実である。文科省においても学校における ICT教育の環境整備が進められており、今後教育の中心的役割を果たすことが予想される。ICTを用いた研究は多数あるものの、高専での体育授業における研究や報告は乏しいのが現状である。高専は中学卒業後より、5ヵ年にわたり高度な専門教育ならびに技術者教育を学ぶ機関であり、高等学校同様に体育を含めた一般教科のカリキュラムも展開されている。本研究の目的は高専において、ICTを用いた体育授業を展開することにより、学生の主観的な理解度がどの程度向上されたかをフィードバックに焦点を当てて調査することで今後の高専体育の質的向上の一助とすることであった。「体育Ⅰ（90分）」のバレーボールの単元の時間を用いて3つのグループを編成した（グループ1：スマホディスカッション群 グループ2：遅延映像を用いた即時フィードバック群 グループ3：教員による口頭指導・見本群）。バレーボールのアンダーハンドパスにおける5つのポイントを提示し、アンダーハンドパスの課題テスト（pre）後、グループごとに異なったフィードバックを行った。その後、再度課題テスト（post）を行い、結果の推移と各フィードバックを行ったことによる主観的理解度を、アンケート調査を用いて比較・分析した。その結果、有意な差はみられなかったものの ICTを用いた群（グループ1およびグループ2）の方が ICTを用いなかった群に比べ、授業を受けたことによって自己の技術向上に役立ったという傾向がみられた。また、遅延映像を用いた即時フィードバック群においては「腕と体幹の角度を一定にする」というポイントにおいてテスト前より理解が深まったという結果が表れた。ICTを適切な場面と方法で用いることによって、効果的に技能の理解を深めることができると示唆された。

Poster (Subdiscipline) | 専門領域別 | Pedagogy

体育科教育学 ポスター発表

[11 教-ポ-11]ダンス作品映像の鑑賞におけるダンス初心者の認知

○Hidemi Soma¹ (1.shigakkan university)

本研究の目的は、ダンス初心の大学生を対象としたダンス作品映像鑑賞時における認知の内容を明らかにすることである。保健体育科教員志望学生の多い体育系大学の専門教育科目受講学生204名のうちダンス初心者161名による回答を分析の対象とした。調査対象者のダンス作品映像鑑賞時の認知を自由記述によって求め、テキストマイニング法を用いて分析を行った。

現代の日本社会においてダンスは多様性を増し、生涯学習の一環としてダンスを踊る楽しみを享受する人の割合も男女を問わず増加傾向にある。一方で、学校教育においてダンス学習は、小学校・中学校・高等学校の体育授業にて行われ、様々な課題も指摘されるところである。体育系大学における保健体育科教員志望学生へのダンス指導法の改善を図ることを念頭に、本研究では学生のダンス作品映像鑑賞時の認知に着目することとした。

体育科教育学 ポスター発表

[11 教-ポ-12]スポーツ指導者としてのコミュニケーション能力育成の学習プログラムの開発と評価

ポストコロナ時代に向けての検討

○Ayaka Habata¹, Yoshiko Murata¹ (1.Heisei International University)

近年、急速に進む情報化の波は、人間関係のありように大きな変化をもたらし、深刻な問題を次々と顕在化させている。スポーツの場面においても、指導者による体罰やハラスメントなどの様々な問題が報じられている。これらの問題に共通する要因として、コミュニケーション能力の欠如や低下が指摘される。しかし、コミュニケーションの重要性が強調される中、2019年末辺りから世界中へと広がった新型コロナウイルス感染症によって生活様式は変化し、人と接触する機会を減らすことやソーシャルディスタンスを保つことが求められるようになった。このような身体的コミュニケーションの機会が大幅に奪われた環境の変化はどのような影響を与えているのか。そこで本研究では、H大学の学生にコミュニケーションに関する質問紙調査を行い、コロナ禍による環境の変容がコミュニケーションにどのような影響を及ぼしたのかを明らかにしていく。そして、ポストコロナ時代のスポーツ指導者としてのコミュニケーション能力育成に向けた学習プログラムを検討するための資料を収集することを目的とした。

本研究の結果、多くの学生がコミュニケーション能力の低下を感じており、コミュニケーションに関する弊害やストレスが生まれていることが明らかとなった。だが、コミュニケーションの重要性を前年度の受講生達よりも実感している様子も伺えた。表情や身振りなどの言葉以外の表現方法を自発的に工夫している様子も見られ、非言語コミュニケーションへの興味や意識が例年より向けられていた。つまり、コロナ禍の環境に陥って直接的なコミュニケーションに制限がかかり、身体を通したコミュニケーションの機会が失われたからこそ、それらの重要性を再認識したと言える。以上より、コロナによってコミュニケーションへの認識の変容が起こったことが明らかとなった。

体育科教育学 ポスター発表

[11 教-ポ-13] 小学校教員志望学生の ICT を活用したマイクロティーチング における授業力量の事例的検討

教授技術と TPACK に着目して

○Makiko ETO¹ (1. University of the Ryukyus)

本研究の目的は、ICT を活用したマイクロティーチングの実践における小学校教員志望学生の授業力量（教授技術・TPACK：Technological Pedagogical Content Knowledge）を事例的に明らかにすることである。

調査は、国立教員養成系大学教育学部の教科の指導法に関する科目を受講した学生（22 名）を対象とした。当該科目における ICT を活用したマイクロティーチングの実践を分析した。学生は、運動領域ごとにグループを編成し、各グループで ICT を用いる場面の設定や使用する動画の作成などの準備を経て、ICT を活用したマイクロティーチングを行った。マイクロティーチングの実践を VTR 撮影し、教師役の学生（各グループ代表 1 名）の教授技術をテキスト化した。テキスト化した学生の教授技術を、体育授業における教師行動（高橋ら、1991）に分類した。また、マイクロティーチングの実践に対して、理解度と適切性の観点から児童役の学生による評価を行った。さらに、学習指導案と授業後の省察の記述の記録から、TPACK（Koehler and Mishra, 2009）に相当する内容を抽出した。

実践されたマイクロティーチングは、以下の通りとなった。すべてのマイクロティーチングの場面は、鈴木（2019）が示す活動提示場面であった。活動提示場面は、手本の動きの動画を見たり、学習者の動きのイメージをつかませたりすることをねらいとした場面であった。学生が活用した機器は、PC（パワーポイント）、タブレット端末（iPad）、大型提示装置であった。それぞれの機器の操作と共に、分析的発問、説明、励ましといった教授技術がみられた。また、TPACK に関する領域の知識が抽出された。なお、詳細は当日に発表する。

体育科教育学 ポスター発表

[11 教-ポ-14]保健体育科教員養成における指導と評価の一体化を図るためのデジタル教材の開発

実態調査による検討

○Minoru Yamada¹, Shinichi Fukuchi² (1.Tamagawa University, 2.Kanagawa Prefectural Integrated Education Center)

本研究は、「保健体育科教員養成における指導と評価の一体化を図るためのデジタル教材（単元計画表）の開発」（山田、2020）の継続研究である。前回の報告では、デジタル教材（単元計画表を Microsoft Excel を使用して設計）の開発に至った経緯や試作版の内容と操作手順及びその教育的価値、成果の検証方法について記した。本研究では、デジタル教材を使用した受講生から、その効果に関する評価と、単元計画表（球技・水泳・体育理論・保健）の作成過程における課題を調査・分析することを目的とした。その結果、効果に関する評価では、多くの項目で、肯定的な結果が見られた。また、設問間の相関において、有意に相関が見られた項目があった。また、単元計画表の作成過程における課題では、調査した10項目の平均得点からは、高い得点から順に、体育理論、保健、水泳、球技の結果となった。特に球技は三つの型（ゴール・ネット・ベースボール）に分かれ、それぞれの型に種目（サッカー・バレーボール・ソフトボール等）があるため、複雑で理解をするのが難しかったと思われる。このことから、受講生への指導は、段階的に習熟を深めるよう教材の配列に配慮しながら行うことが必要であることが示唆された。国立教育政策研究所では、これまで1時間単位の授業の中で行われることの多かった学習評価を、スパンを長くして単元や題材のまとまりとしての評価として行うことを求めている。1時間単位の完結した学びから時間をかけながら学んだことを学びの文脈として捉えることで、学習のつながりを図ろうとすることが求められている。これまで指導案作成というと、様式の体裁や評価規準の文末表現を整えることに重きが置かれ、授業の中身に力が注がれていなかったのではないかと。その課題を、デジタル化と可視化により、全体像の把握が容易になったことにこそ本デジタル教材の可能性があろう。